

俳句雜誌

空

空

令和2年3月31日発行

第18巻1号

通巻第89号



2020・3

SORA 89号

無策

柴田佐知子

寒禽の影の過ぎたる自裁の間

冬萌に乗り上げてくる車輪かな

泥靴となつてしまひぬ探梅行

曇天に山なみ問へ真菰の芽

魚捌く出刃や薄刃や春の雪

雛市や金糸銀糸の光浴び

春光をつまみころがし飴細工

客席は石の階なり村歌舞伎

風船をもらひそのまま神隠し

花屑の吹き寄せられて色なせり

はこべらや並べし園児すぐ歪み

園児みな容れて春野を発車せり

いつか背へ日差しの廻る菊根分

熟考の果ての無策や夕がすみ



福岡 高倉和子

亡き父の背中もありぬ冬田打ち

単線の大きく曲る枯野かな

炬話の終りて風の音ばかり

忌日また増えし故郷や冬桜

魚捌く水の勢ひ十二月

闇汁の上を腕の交差する

爪を切る体は丸しちやんちやんこ

寒鯉の向きを変へたる濁りかな

東京 中田みなみ

肌寒や奥行深き山のいろ

十二キロ減りてつまづく草の花

竜胆へ息を溜めては歩みけり

釣船草咲く積湯の端に沈む

伸びてゆく爪を愛しみ糸瓜水

高原が眼下に迫る秋のこゑ

まつくろな鴉へ反射禅寺丸

著我の葉の艶に力や冬に入る

福岡 柴田志津子

木の実落つ寝墓百基に音たてて

鰯雲神父に遠き祖国あり

磔像の三本の釘冬来る

今の世に合はぬ法書がぼろ市に

毛皮押し込む整骨院のロッカーに

引き受けしことの重さよ実紫

飲み了へて眉間広がる葛湯かな

三面鏡一枚に雪降りゐたり

長崎 荒井千佐代

髪切つて耳のさみしき冬初め

茶畑のここが北限小六月

なだらかな土塁につづく冬菜畑

正鵠にちかき矢の穴山眠る

城跡の風攻めにあふ冬櫓

賽銭箱の幅だけ開きて白障子

紐状のもの閉ぢこめて初氷

大楯のがくと傾く胸騒ぎ

福岡 岸 洋子

新蕎麦の湯気ふり被る招き猫

ゆく秋や貰ひてのなき桐箆筒

薬黒く絡み合ひてもまんじゅさげ

親指ほどの松茸退院おめでたう

平穏なひと日を謝せり返り花

抜けるとはこのやうな空蓮の実飛ぶ

小春日の尋常小学同期会

山眠るこぼれんばかりの墓抱き

北九州 深川 淑枝

左へと絵巻のすすむ良夜かな

能の出の一笛高し薄月夜

夕紅葉濃し刀傷もつ寺門

首洗ひ井戸ありて野の冬深し

切腹岩平らや青む雪ぼたる

狐火や石棺の内朱に塗られ

秋澄むや鏝一塊の出土剣

銅鏡に映りしはみな冬景色

広島 戸栗 末廣

銀漢へ鐘を大きく撞きにけり

天の川からの一滴かも知れず

初さんま五十年目の妻と喰ふ

水古き堀に初鴨混み合へる

湯けむりに風のからまる冬隣

茶の花の垣に雀のさざめける

含め煮の高野豆腐や雪催

どの影もそこに止まり小六月

福岡 角野 良生

老後にもなほ老後あり山椒魚

火の橋が火の滝となり花火果つ

酒一合豆腐半丁夕蛙

密命を帯びし貌なり鬼やんま

待つことも地獄にあらむ蟻地獄

おはぐろの翅ちぐはぐに動きけり

カンナ赤し嘘吐きとほすにも力

さやけしや白一色の点字本

大野城 森 田 明 成

まどろみの験貫く稲びかり
生家なき里となりけり赤とんぼ
行くほどに匂ひてきたる秋祭
高階の音なき眺めそぞろ寒
行く秋や更けて明るき大都会

粕屋 秋 千 晴

一匹となる鈴虫の闇夜かな
にはとりの小屋ごと浮かぶ秋出水
秋夕焼浴びたる馬の匂ひかな
紅葉の一段ごとに濃くなりぬ
冬の蜘蛛己れを吊るすのみの糸

熊本 松 田 明 子

幕間の賑やか過ぎる村芝居
大柄な姫にかしづく村芝居
見得を切る間のやや長し村芝居
悪役は当たり役なり村芝居
閑伽桶の正しく積まれ秋日和

福岡 栗 原 京 子

横顔で売らるる魚や秋深し
吠ゆる犬を納屋に押し込み柿を売る
ひとり居の家に連れたき案山子かな
うわさほど悪漢でなし濁り酒
炉話の泡飛んでくる武勇伝

大宰府 山 本 則 男

白桃のしづかな夜となりけり
末枯るるものより風になりゆけり
真つ直ぐと決めてゐるなり鬼やんま
噴煙の高さ変はらず鳥渡る
もう誰も見えぬ高さの帰燕かな

直方 曾 根 富 久 恵

秋祭準備の品を路地に置く
神幸の馬丁は乙女秋高し
仏壇の塵よく見ゆる秋の昼
小雪や旧家の廁見学す
長身を折り曲げ若き紙漉女

福岡 永 淵 惠 子

どの木より高き十字架秋澄めり
身に入むや即身仏の前のめり
寝かせ干す鳥の土笛冬隣
小春日や願かけ石に手をあてて
乾鮭の千の眼に見下ろさる

長崎 仲 里 奈 央

親馬鹿の極みの日なり七五三
捨案山子置いてきぼりをくはされて
落葉搔く寂しくないと唱へつつ
涙出ぬ癖つきにけり秋の空
気付かない振りも必要秋夕焼